

町屋橋

郷土史家 西羽 晃

明治になって、東海道の町屋橋（町屋川橋とも言う）が架け替えられた。町屋橋は幾度も架け替えられており、その変遷を判る範囲で辿ってみたい。

東海道を横切る町屋川に架橋されたのは寛永 12（1635）年といわれるが、その橋がどんな構造であったかは、不詳である。明暦 3（1657）年に桑名藩主・松平定良が京都で死去して、その遺骸を桑名まで運んできた時に、町屋川は大水のため渡ることが出来ず、繩生の真光寺で3日間、安置したといわれる。その時の町屋橋は「流れ橋」であって、平常は水面より橋は少し高いが、大水になると、水面の方が高くなってしまいう構造であったかもしれない。

万治 2（1657）に編さんされたといわれる「東海道名所記」（浅井了意編）は「まちや橋 小橋 大橋 長さ百六十間（約 288 尺） 土ばし也」とある。これだけでは高さが判らないが、「土橋」であって堅牢な橋ではなかったであろう。

元禄 2（1689）年出版の『一目玉鉾』（井原西鶴編）では「小橋有大橋百六十間の土はし也」とある。

元禄 3（1690）頃の 1 「東海道分間絵図」（菱川師宣編）では小橋と大橋が描かれて、「時により、此橋かはる（替わる）」とあり、水流によって中州が変動するので、その度に橋が架け替えられたと思われる。



1 東海道分間絵図（平岡潤写『桑名市史』補編）



2 東海道分間延絵図

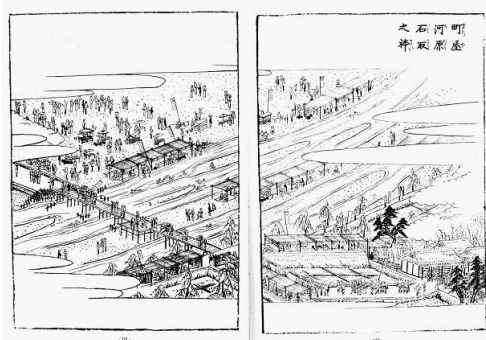
その後、100年ほど後であるが、享和元（1801）年編さんの2「東海道分間延絵図」では「仮板橋」が大1本と小本の計3本が描かれている。板橋であったようだが、長さなど書いてない。

ほぼ同じころの文化元年（1804）年に完成したと思われる『久波奈名所図絵』では川筋は4本に分かれているが、1本の大きな板橋である。途中で馬が退避する場所が設けられている。長さは書いてないが、川の途中まで土堤で張り出しており、橋そのものは短くしているようだ。そして「満水にて橋岸損し、橋板流れし時は、船にて渡す。安永村の西に御用の船小屋常にあり」とある。「御用の船」とは幕府の輸送物を運ぶ特別な船である。

天保14（1843）年編さんされた『東海道大概帳』では「125間と37間で幅はいずれも1間半（約2.7間）である。

嘉永5（1852）年に架け替えられた橋は長さ184間で幅1丈（約3間）で中央に馬の退避場があった。図はないが、1本の長い橋であったろう。

その橋は幕末維新期に通行量が非常に増えて、僅か20年ほどで老朽化してきたし、人力車の通行も多くなってきたので、明治政府が架け替えをして、明治7（1874）年10月24日に落成した。板橋で長さ120.5間、橋幅2間（約3.6間）で、両岸に土手を築いて川幅を短くして、橋の長さも短くしたようだ。



『久波奈名所図絵』より



明治の町屋橋